

ふるさと御所 文化財探訪

其の四

縄文時代〈2〉

生涯学習課文化財係
☎内線696

従来、縄文時代と弥生時代の区別は明らかでした。遠賀川式土器とも言われる弥生前期の土器と共に、朝鮮半島から稲作農耕と金属器が伝わったとされてきたからです。

しかし昭和53～56年にかけて、福岡県福岡市の板付遺跡と佐賀県唐津市の葉畑遺跡において相次いで、それまで縄文晩期後半に位置付けられていた夜臼式土器（近畿では滋賀里Ⅳ式に併行）に伴う水田跡が発掘され、常識は覆りました。しかも両遺跡で見つかった水田は、矢板や杭によって水路や畦畔（うね・あぜ）を補強する本格的なもので、耕作に必要な鍬・鋤などの農耕具もそろって出土しました。このことから稲作は、まず北部九州にもたらされ、当

写真① 観音寺本馬遺跡の住居跡



初から完成された姿であったことが分かります。弥生早期とも位置付けられるようになったこの時期は、今から約2800～2700年前とみられます。

さて、平成19年度の京奈和自動車道建設に伴う発掘調査では、その直前の時期、今から約3000～2800年前（縄文晩期中ごろ…近畿では滋賀里Ⅲa及びⅢb式）の観音寺本馬遺跡が新規発見されました。

写真①は住居跡とみられる遺構です。中央の炉を囲んで直径約8mの円形に遺物が分布する範囲があり、

写真② 石冠



据え置ききの柱による、やや簡易な構造の建物の存在が想定されます。

この住居跡の床面からは石冠（写真②）や深鉢（写真③）など豊富な石器や土器が出土しました。石冠は高さ8cmで男女の性を抽象化した呪術具とみられています。深鉢は口径34cmで、外面には火を受けた痕跡があり、水を入れて堅果類（ドングリやクリ）を煮たものでしょう。口縁部には箸枕状突起とリボン状突起を合成した装飾があります。

やや離れた場所から出土した注口土器（写真④）は、現在の急須や土瓶のような形をした土器で、口径は13cmを測ります。竹管を押しつけたり粘土を貼ったり付けたりして表面を飾っており、大変珍しい文様構成です。

元来は、石冠は東北～中部地方の縄文中期に、また、このような形の注口土器は東北～関東地方の縄文後期に起源をもちます。北部九州にもたらされた弥生文化に西日本が急激に移行するのは、観音寺本馬遺跡で生活が営まれたところから、わずか200～300年ほど後のことでした。



写真④ 注口土器



写真③ 深鉢

編集後記

飛騨の名峰、乗鞍岳に登ってきました。3kmを超える山ですが、頂上付近まで路線バスで上がれるので、何か申し訳ないと思えるほど楽な登山でした。膨大な量の残雪と特有の雄大な地形景観が素晴らしく、さらには、梅雨の最中にもかかわらず天候にも恵まれ、早朝には感動的な御来光を眺めることができました。（久）



2008. 8